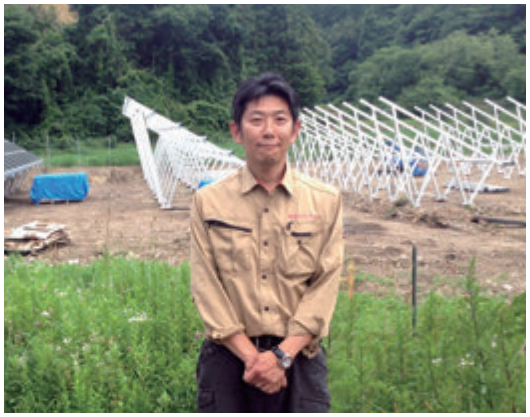
移住者インタビュー③

## 太陽光発電所経営
# 阿部幹司さん



### 自給自足の暮らしと発電事業への取り組み。

仙台市で保育士として働いていた阿部さんは、東日本大震災で家が一部損傷したため、山形県最上町に避難。それが縁で栗原市の北部、花山に地域おこし協力隊として赴任した。

「新規就農者が移住しやすい環境を整えるために人的ネットワークや情報収集に取り組んでいました。農地の譲渡や農機具の購入など、移住者を受け入れてやすい環境にしていきたいと思ってまずは自分が移住しました」。協力隊を退職した今も同じ活動を続けつつ、自給自足の暮らしをしながら、現在は太陽光発電事業に着工している。

### 教育環境の整っている里山。

阿部さんはお子さんが三人いる。「子どもたちは栗原市でたくさんの「初めて」を経験しました。例えば野菜の収穫や餅つき、星空を見ることなど自然体験の中から豊かな感性が生まれてきた」と言います。

また、花山幼稚園・花山小学校ともに小規模ながら教職員の熱心さな姿勢に共感し、入園入学させたいと思ったのが移住の決め手だったそう。家族が移住（平成２４年４月）してきてから地域での交流の輪が広がり、農林業に熟達している地域の方から採れたての野菜などをおすそわけしてもらうことも多く、逆にそれをアレンジして現代風の料理としておかえししたりの毎日なんだそう。

移住者インタビュー④

## 自然学校指導者<br>自然学校職員
# 塚原俊也さん

### 自然環境でアトピーが楽になった。

神奈川県にある中高一貫の私立学校で教師をしていたという塚原さん。身体を動かすのが好きで、自然学校の仕事がしたくて２００４年にはじめて栗駒耕英にやってきた。やりたい仕事のために偶然選んだ栗原だったものの、最初からうれしい驚きの連続だったという。

「お米と水がおいしいですね。持病のアトピー性皮膚炎が改善しました。結婚相手と家族にも恵まれたし、温泉が近いし、雪が面白いですね」。

### 厳しい雪を味方にする生活。

雪が面白い？とは何なのかお聞きしてみると、栗駒耕英の地域は積雪量が多く、イグルーをつくって楽しめるそうだ。昨年から氷のＢＡＲもつくっている。お話を聞いていると、ともすればネガティブに考えてしまいがちな雪の多さなどの地域の課題を塚原さんはポジティブに考える癖がついているようだ。

「開拓地の方々の生きる力がすごくて、近隣の８０代から２０代まで幅広い方にお世話になっています。みなさんのお話を聞きながら、住民として地域をどのようにつくるかポジティブに考えられるようにしています。深い自然環境にある地域だからこその課題もありますが、同時にここで暮らしを創っていくというやりがいがありますね」。

移住者インタビュー⑤

## そば屋兼農家
# 伊藤廣司さん

### サラリーマンからそば屋の主へ。

花山に移住して、山菜・きのこの直売所、そば屋ざらぼうを始めた伊藤さん。旧花山村へは、仙台市に住んでいた頃に何度か仕事で訪れていた。「法令関係の出版社に勤めていたので、役場に来ることが多かったんです」。何度か訪れているうちに、セカンドライフは田舎で暮らそうと、移住する10年も前から考えていたという。農業にも関心があった。そして2004年に移住し、米づくりに挑戦した。「たまたま農地法の構造特区を申請するからと言われ、許可されて断れなくなったんです(笑)」。

### 地域の住民としては、若者?

現在は築50年という農家の物置小屋の古材を譲り受け、梁と柱はほぼそのままに、新しい材料を組み合わせたこだわりの家で、妻のイクヨさん、娘さんといっしょに暮らしている。新材は無垢材、壁は漆喰、塗料・断熱材にいたるまで自然素材を使用し、身体と環境にやさしい家となった。土日祝日はこちらで手打ちそばを食べることができる。40食限定だ。

地域の住民となってから、伊藤さんはいろいろな地域の役職についている。

「67歳なのですが、この地域では若いほうの部類なんですよ(笑)」。のんびりしたいんですが、忙しすぎて、と笑う。

移住前に知っておきたかった知識や手続きについては
ご本人のホームページに詳しく紹介されているのでこちらも参考にしてほしい。
**田舎暮らしのための手続きあれこれ　http://www17.plala.or.jp/zarabo/**

移住者インタビュー⑥

## 陶芸家
# 工藤修二さん

### 自宅に窯がある生活。

花山で焼締めの陶器を製作している工藤さんは座主窯という屋号で活躍する陶芸家だ。奥さんとそのお母さん、そして猫5匹といっしょに自宅兼工房で暮らしている。

「自分の窯を持つため25年前に移住してきました。修業時代からよく、温泉や渓流釣りのために旧花山村に足を運んでいたんです。だからずっとこの花山で開窯したいと思っていました」。

工藤家の敷地内には展示販売をしているギャラリースペースがあり、隣には制作できる大きな窯がある。工藤さんの器を扱う飲食店は市内各所にあり、道の駅でも器が販売されている。

### 大事なのは、よき隣人になること。

移住した際はまったく知り合いがいなかったが、近隣の住人が興味を持ってくれて窯焚きの手伝いに来てくれたりしたそうだ。移住者の方にはよき隣人になることを心がければすぐに地域に馴染めるとアドバイスいただけた。

「近隣の方との関係はずっと続いていて、野菜とかよくいただきますね。遠方の方も尋ねてきやすいように、将来は陶器販売のギャラリースペースにお茶を飲めるカフェをつくれたらと思っています」と語ってくれた。